

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. II, 2005

仙石山論集 第2号（平成17年）

県立金沢文庫蔵「往生裏書」解題・翻刻

上
杉
智
英

県立金沢文庫蔵「往生裏書」解題・翻刻

上 杉 智 英

解題

はじめに

ここに翻刻紹介する「往生裏書」は神奈川県立金沢文庫蔵本である。金沢文庫所蔵の浄土教に関する典籍は既に塚本善隆氏^①、佐藤哲英氏^②、石田瑞磨氏等^③によって紹介されており、また『金沢文庫資料全書 第四卷 浄土篇^④』には十二点に及ぶ解題・翻刻が収録されているが、本書「往生裏書」については何れも言及されていない。本書は前・後欠の写本であり、書名も不明（「往生裏書」は後代整理書名）であるが、実際には後述するように天台宗山門派の真源（一〇六四―一一三六）撰『往生要集裏書』^⑤の断簡であり、浄土教に関する典籍である。

源信撰『往生要集』の後代への影響は大きく、鎌倉期に著された長西（一一八四―一二六六）の『浄土依憑経論章疏目録』には、その註釈書として、

往生要集裏書 一卷 真源 証揚律師
山僧

県立金沢文庫蔵「往生裏書」 解題・翻刻（上杉）

二

往生要集依憑記 三卷 同

往生要集修念仏作法 一卷 昌誉

往生要集勘文 六卷 平基親俗

往生要集外典鈔 一卷 同

往生要集疑問 一卷 澄憲

往生要集科文 三卷 称名庵

往生要集料簡 一卷 黒谷

（『大日本仏教全書』旧版一、三四六頁。新版九六、一四六・一四七頁）

と、八点が採録されている。しかし、その中で現存しているのは真源撰『往生要集裏書』、平基親撰『往生要集外典鈔』^⑥、黒谷（法然）撰『往生要集料簡』^⑦の三点だけであり、『往生要集』の註釈を研究対象とする上で資料の収集は重要な課題と言える。『往生要集裏書』についても名古屋真福寺蔵本の存在と逸文が僅かに知られているだけの現状において、本書の資料価値は貴重なものであるとの認識から、ここに紹介させて頂く。

一、書誌概要

書誌の概要は、神奈川県立金沢文庫所蔵、資料番号九〇・一〇。写本。書写年次・書写者は不明。楮紙。粘葉装。現存十四丁の残欠本。半葉七行、一行二〇―二三字。押界。法量、縦二三三mm、横一五一mm、字高一九五mm。天界二一mm。地界一七mm。界幅一八mm。前・後欠の為、外題・内題・尾題等は確認できない。二丁裏（往生裏書□丁）・四丁裏（往生裏書□□）・六丁裏（往生裏書□□）・八丁裏（往生裏書 七丁）・一〇丁裏（往生裏書 八

丁）・一二丁裏（往生裏書 九丁）・一四丁裏（往生裏書 十丁）の各継目に「往生裏書〇丁」の隠し丁付けがみられ、これに基づき書名を「往生裏書」と仮題し、架蔵されたものと考えられる。二丁裏―三丁表間、六丁裏―七丁表間に錯簡が認められる。

二、書名の比定

本書は書誌概要で述べたように前・後欠の断簡であり、外題・内題・尾題の何れも確認できない。ただし「往生裏書」と隠し丁付けがなされており、これを書名として現在では架蔵されている。仮題である「往生裏書」に近い書名として、前述の『浄土依憑経論章疏目錄』には、

往生要集裏書

一卷

真源証揚律師
山僧

〔大日本仏教全書〕旧版一、三四六頁。新版九六、一四六頁〕

の記述がみられる。この真源撰『往生要集裏書』は『仏書解説大辞典』（第一巻、三六七頁）では「欠」とされているが、良忠（一一九九―一二八七）撰『往生要集義記』に「裏書云……」として引用される三文、並びに佐藤哲英氏によって昭和四三年に名古屋真福寺から発見された『往生要集勘文』（断簡）に「裏云……」として引用される五文の計八文の逸文が先行研究によって確認されている。そこでこれらの逸文を「往生裏書」と照合してみると、

祇園寺無常堂四隅有頗梨鐘等者

有本
無之

裏書云祇園寺者舍衛国給弧独園也須達長者名曰給弧独依之言給弧独園亦曰祇陀林本是祇陀太子林也故言祇陀

林又曰逝多林

〔翻刻〕2―6行目。『往生要集義記』、『浄土宗全書』十五、二二〇頁）

儒童捨全身而始得半偈

畧立金沢文庫蔵「往生裏書」解題・翻刻（上杉）

裏云釈迦者然燈佛時名為備童

（翻刻）87—88行目。『往生要集義記』、『浄土宗全書』十五、二三—二四頁

の二文が両者間で一致した。

また本書の構成はこれら逸文と同様に、まず「『本文』云……」と『往生要集』を引用し、「『裏書』云……」「『裏』云……」としてそれに註釈を加えるといった形からなる。なお註釈の内容の殆どは『往生要集』にみられる譬喩・因縁の本説を提示するものであり、叡山文庫天海蔵蔵、良忠撰『往生要集抄』の第四冊末には、

此集（『往生要集抄』：筆者注）具書事（中略）裏書上下（少少本説等檢之未^マノ知誰人ノ作或云真源^⑨）

（叡山文庫調査会編『叡山文庫天海蔵識語集成』、二〇〇〇、四三頁）

と、『往生要集裏書』の内容が本説等を檢じたものであつた旨が記されている。

以上、県立金沢文庫蔵「往生裏書」の隠し丁付けにみられる「往生裏書」の書名、逸文との照合、構成・内容等を踏まえると、本書は真源撰『往生要集裏書』の断簡である蓋然性が高いと考えられた。そのような折に、名古屋真福寺蔵『往生要集裏抄』（以下、真福寺本）を拝見する機会を得、それが真源撰の『往生要集裏書』であることを確認することができた。^⑩そこで両書を対照してみると（翻刻、下段校異参照）、字体の違い、多少の文字の出入等は見られるものの内容・構成は一致し、これにより県立金沢文庫蔵「往生裏書」が真源撰『往生要集裏書』の断簡であると比定するに至った。

三、真福寺本との比較

真福寺本は全四九丁であり、『往生要集』の引用（本文云……）とその註釈（裏書云……）を合わせて一項目とすると三六項目から構成されていることとなる。このうち『往生要集』の引用部分を列挙すると、

○大文第二厭離穢土

1. 復有頹部陀等八寒地獄具如經論不遑広述之（二七、a）
2. 雇鹿杖自害（三八、c）
3. 法句譬喻經偈云非空非海中非入山石間（三九、a）
4. 譬如野干失耳尾牙詐眠望脫忽聞斷頭心大驚怖（三九、a）
5. 如經偈云一人一劫中所受諸身骨常積不腐敗如毘布羅山（三九、c）
6. 大經云生人趣者如爪上土墮三途者如十方土（三九、c）

○大文第二欣求淨土

- ⑬ 猶如盲龜值浮木（四五、a）
- ⑭ 儒童捨全身而始得半偈（四五、a）
- ⑮ 常啼割肝府而遠求般若（四五、a）

○大文第三極樂証拠

18. 觀音勢至本於是土修菩薩行轉生彼国（四七、a）

○大文第四正修念仏

19. 調達誦六万藏經猶不免那落（四九、c）
20. 慈童發一念悲願忽得生（四九、c）
21. 即引無行經喜根菩薩偈（四九、b）
22. 三十七品是僧業（五〇、c）

7. 利衰八法莫能免（四〇、a）

8. 如馬鳴菩薩頌吒和羅伎声唱云（四〇、b）

- ⑨ 祇園寺無常堂四隅有頗梨鐘（四〇、c）

- ⑩ 雪山大士捨於全身而得此偈（四〇、c）

- ⑪ 如痴狗追塊（四〇、c）

- ⑫ 西域記云婆羅痾斯国施鹿林東行三里有涸池（四〇、c）

- ⑬ 如彼身子等六十劫退者是也（四五、c）

- ⑭ 象子力微身歿刀箭（四六、a）

23. 譬如波利質多樹華一日薰衣瞻蔔華婆娑師華雖千歲薰所不能及（五一、b）

24. 又弥伽大士聞善財童子已發菩提心（五一、c）

25. 梵天不見其頂目連不窮其声（五五、c）

○大文第五助念方法

26. 一応思念四十八本願（五八、c）

27. 令衆生離十二入故（六六、c）

○大文第七念仏利益

28. 老女見仏邪見不信猶能除却八十萬億劫生死之罪（七一、c）

○大文第九往生諸行

29. 大象出窓遂為一尾所礙（七八、c）

30. 藥王本事避塵竇居雪山（七八、c）

○大文第十問答料簡

31. 屠刃之慶好惡由何乎（七八、c）

34. 以鷄狗業樂求天樂是即惡見（八五、b）

32. 鳩鳥入水魚蚌斯斃（八三、c）

35. 其出家人亦有三類具如止觀第四（八七、b）

33. 施檀樹出成時能變四十由旬伊蘭林普皆香美（八三、c）

36. 十輪經偈云被恒河沙仏解脫幢相衣（八八、b）

（一）内は『大正藏』八四卷の頁数、段。なお金沢文庫本と一致する引文は丸数字で示した
となるが、これらのうち⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰の九文が金沢文庫本所引の『往生要集』と一致す
る。

ただし真福寺本における『往生要集』引文が概ね『往生要集』の構成に則り、大文第一から大文第十の順に配
列されているのに対し、金沢文庫本では、

- ⑫（二丁表）、⑬（二丁裏）、⑨（三丁表）、⑩（四丁表）、⑪（六丁裏）、⑭（七丁表）、⑮（七丁表）、
⑯（二三丁裏）、⑰（一四丁表）

と、その配列が異なり、そのうち⑬―⑯間（二丁裏―三丁表間）、⑪―⑭間（六丁裏―七丁表間）は、

⑬—⑨間（二丁裏—三丁表間）

施亦可安汝意諸鹿得安在得仁信鹿群所居故名鹿

苑云⑬本文云猶如盲龜值浮木欣求淨見仏開法樂「2ウ

□無常苦空無我聞者悟道五百王□厭世出家「3オ

王恐民尽禁伎不行云々⑨本文云祇園寺無常

堂四隅有頗梨鐘同

⑪—⑭間（六丁裏—七丁表間）

前成阿耨菩提云云⑪本文云如癡狗追塊（同）

裏書云玄義第二釋絶待妙中言語從覺觀生「6ウ

裏云弘決如大海中有一盲龜爾時海中復有浮木木「7オ

唯一孔可立龜身此龜三千年方得一出億百千出何由可值

浮木之孔⑭本文云儒童捨全身而始得半偈同

と、現状では文脈が通じない。そこで真福寺本に拠り、⑪、⑫、⑬、⑭という形になるよう、⑪—⑭間（六丁裏—七丁表）に⑫—⑬（二丁表—二丁裏）を差し込むと（翻刻）参照、文脈も通じ、金沢文庫本は一連の断簡となる。つまり金沢文庫本の現状は錯簡していると考えられ、錯簡以前の金沢文庫本の形態は、

〔三オ・三ウ・四オ・四ウ〕↓〔五オ・五ウ・六オ・六ウ〕↓〔二オ・一ウ・二オ・二ウ〕↓

↓〔七オ・七ウ・八オ・八ウ〕↓〔九オ・九ウ・一〇オ・一〇ウ〕↓（以下、順次一四ウ迄、「」は一紙単位）であつたと推測される。これらは前述の通り真福寺本の⑨—⑰に一致するものであり、金沢文庫本にあつて真福寺本にみられない、といった金沢文庫本特有の項目はみられない。つまり金沢文庫本は真福寺本の⑨—⑰（六丁表、七行目—二丁裏、四行目）に相当する断簡と比定され、真福寺本を完本とみなした場合、その割合は凡そ三割といえる。

なお、この錯簡については、

金沢文庫本の親本が錯簡していたのをそのまま書写した。

書写した後に錯簡を起こした。

と、その錯簡の起こった時期に対して二通りの想定がなされる。

金沢文庫本は、八丁裏に「往生裏書 七丁」、一〇丁裏に「往生裏書 八丁」、十二丁裏に「往生裏書 九丁」、十四丁裏に「往生裏書 十丁」と丁付けされており、このことから、

七丁……〔七丁表・七丁裏・八丁表・八丁裏〕

八丁……〔九丁表・九丁裏・一〇丁表・一〇丁裏〕

九丁……〔十一丁表・十一丁裏・十二丁表・十二丁裏〕

十丁……〔十三丁表・十三丁裏・十四丁表・十四丁裏〕

と、一紙単位で丁付けされていることが知られる。この丁付けは、本文と同筆の隠し丁付けであることから、粘葉装に装幀する以前、つまり書写段階で付されたものと考えられる。

そこで七丁〔七丁表・七丁裏・八丁表・八丁裏〕から遡源すると、

六丁……〔五丁表・五丁裏・六丁表・六丁裏〕

五丁……〔三丁表・三丁裏・四丁表・四丁裏〕

四丁……〔一丁表・一丁裏・二丁表・二丁裏〕

となり、四丁裏の隠し丁付けには「五丁」と記されるべき所であるが、実際の四丁裏をみると、虫損で判読し難いが、残画から「四」ではないかと推察される。これは、

七丁……〔七丁表・七丁裏・八丁表・八丁裏〕

六丁……〔一丁表・一丁裏・二丁表・二丁裏〕

五丁……〔五丁表・五丁裏・六丁表・六丁裏〕

四丁……〔三丁表・三丁裏・四丁表・四丁裏〕

と前述の、推測された錯簡以前の形態に丁付けした場合と一致するものであり、このことから金沢文庫本の現状にみられる錯簡は書写以降に起こったこと、さらに現存している金沢文庫本の第一紙目（三丁表―四丁裏）が、書写段階では四丁（第四紙）目に相当していたことが知られ、そこから金沢文庫本の前欠部分が三丁（三紙）であることも推定される。

おわりに

従来、未紹介であった県立金沢文庫蔵「往生裏書」を真福寺蔵『往生要集裏書』と照合することにより、本書が真源撰『往生要集裏書』の断簡であると比定し、現状に錯簡が認められること、前欠部分が三紙であることを明らかにし得た。本書が『往生要集裏書』の断簡であることが確認されたことにより、翻って、従来孤本であった真福寺蔵本を部分的ではあるが校訂することが可能となった。

また『往生要集裏書』における『往生要集』の註釈の殆どは本説の提示である為、個々の註釈はそれ自体で完結しており、相互に関連して思想等を明示するといった体系的なものではない。その為、真福寺蔵本のみでは、それが『往生要集裏書』の原形態を保っているのか、もしくは原形態からの抄出本であるのかを判断することは不可能である。そのような現状において、県立金沢文庫蔵本の発見により、両書所引の『往生要集』の文が一致しているという事象が知られたことは注目に値する。もちろん、金沢文庫本は断簡であり、その内容量は真福寺本の三割に相当するに過ぎず、また両書の関係、系統等が明らかになっていない現時点で結論を出すことは早計であるが、本書はこの命題を考察していく上での一つの手懸かりとなるものであり、その資料価値は高いと考えられる。

末筆ながら貴重な資料の閲覧ならびに翻刻掲載に当たり、御高配、御配慮賜りました称名寺御住職・須方隆證様ならびに高橋秀榮様をはじめとする県立金沢文庫御当局様、宝生院御貫首・岡部快圓様ならびに宝生院御当局様に衷心より甚深の感謝を申し上げます。

注

- (1) 「〔金沢文庫所蔵〕浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」(『浄土学』二、一九三三)。
- (2) 「金沢文庫に見存する恵心僧都撰述に就いて」(『龍谷字報』三〇九、一九三四)。
- (3) 「金沢文庫における浄土教典籍」(『金沢文庫研究』二四四、一九七三)。
- (4) 神奈川県立金沢文庫発行、一九八〇。
- (5) 真源の行実・著作、『往生要集裏書』については、筆者口頭発表「真源撰『往生要集裏書』について」(二〇〇四年度秋季、韓国日本文化学会、於韓端大学校)。
- (6) 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』資料編、二五九―二七四頁(百華苑、一九七九)に解説・影印・延書あり。
- (7) 石井教道〔昭和
新修〕『法然上人全集』(平楽寺書店、一九五五)には黒谷(法然)の著述として『往生要集註要』『往生要集料簡』『往生要集略料簡』『往生要集釈』と『往生要集』の註釈書が四点収録されている。ただし『浄土依憑経論章疏目錄』にみられる「往生要集料簡 一卷」が何れに該当するかは不明。
- (8) 福原隆善『叡山における『往生要集』の展開』、二五〇頁(往生要集研究会編『往生要集研究』、一九八七)。佐藤哲英『叡山浄土教の研究』研究編、二七二―二七三頁(百華苑、一九七九)。なお佐藤哲英氏が「断簡」を『往生要集勘文』とするのは誤りであり実際には真源撰『往生要集裏書』の後半部分である(前掲、註5)。

(9) 「少少」の意味不明。「ノ」は「之」の誤りか。

(10) 前掲、註5。

(11) 真福寺本の書誌について略述すると、原装は同筆の『往生要集外典抄』『源信書状、周文徳返報』と合綴される全六四葉の粘葉装一帖、うち四九葉が『往生要集裏書』に相当する。中途(三五一三六葉の間)で二分されており、各帖の首には「尾張国大須宝生院経藏圖書寺社官府点檢之印」が捺される。每半葉七行で一行一六―一八字。法量は縦二五〇mm、横一六二mm、界線は押界で界高二〇五mm、界幅一九mm。表紙は中央に外題「往生要集裏抄」、右下隅に箱番号「二十七合」、左下隅に「慶西之」と記される。慶西については不明。『往生要集裏書』自体の本奥書は見られないが、同筆で書写されている『源信書状、周文徳返報』の末には、

文暦二年(大才己未) 七月十六日書写了

と、全帖の書写奥書と思われる記述がみられることから、『往生要集裏書』の書写も文暦二年(一二三五)頃と考えられる。

(12) ただし、21(『大正蔵』四九頁b、九行目)が19(『大正蔵』四九頁c、一二―一三行目)、20(『大正蔵』四九頁c、一三行目)の後に配置されている。

県立金沢文庫蔵「往生裏書」 翻刻

凡例

- 一、 県立金沢文庫蔵「往生裏書」（所蔵番号、九〇―一〇）を底本として翻刻する。
- 一、 底本にみられる錯簡を真福寺蔵『往生要集裏書』に拠り訂正した形で翻刻した。
ただし丁付は錯簡訂正以前の現状のままを付した。
- 一、 古体・異体・俗体等は原則として通行の字体に改めた。
なお、略体・抄物書等（井・井・炎・王王・廿・卅・冊）は本字に改めたものを「」で括り示した。
- 一、 補入符号や旁書等、行間に記入されている文字は（ ）で括り本文に組み込んだ。
- 一、 見せ消ち符号の付されている文字は「」で括り示した。
- 一、 底本において、明らかに誤脱と認められる箇所も、私意を以て改めることはしなかった。
- 一、 虫損等により判読不能な箇所は、その字数分を空格（□）で示した。
- 一、 踊り字符号は「々」として示した。
- 一、 冊子の丁移りの箇所を（「幾オ・ウ」）として示した。
- 一、 文字の大小に配慮して翻字したが完全ではない。
- 一、 便宜上、本文行頭に行番号を付した。
- 一、 真福寺蔵『往生要集裏書』との校異を下段に示した。

(三紙前欠)

1 □¹無常苦空無我聞者悟道五百王□²厭世出家
2 王恐民尽禁伎不行^{云々}本文云祇園寺無常
3 堂四隅有頗梨鐘^同
4 裏書云祇園寺者舍衛国給孤獨園也須達長
5 者³曰給孤依之言給孤獨園又曰祇陀林本是⁴
6 祇陀太子林也故言祇陀林又曰逝多林祇園⁵
7 經云無常院中有一堂但以白銀飾○院有八鐘四白銀⁷

┌
3
才

1. 於
2. 子

3. 者十名
4. 孤十獨
5. 亦

6. 「○」なし（二文字分空格あり）

7. 銀十四

8 頗梨銀鐘在院四角起台置之頗梨鐘者在無
9 常堂四角○其頗梨鐘形如腰鼓鼻有一〔念〕²金毘
10 命乘金師子手執白仏病僧氣將大漸是金毘命⁵
11 口說無常苦空無我手拳白仏鐘即自鳴音中亦說諸
12 行無常⁷至乃寂滅為樂病僧聞音苦惱即除得清
13 冷樂如入三禪乘生淨土若大德人四頗梨鐘腹⁹
14 □光明光中所說菩薩三度病人見光生諸仏国¹¹

「 3 ウ

- 1. 「○」なし（一文字分空格あり）
- 2. 「念」なし
- 3. 命
- 4. 払
- 5. 命
- 6. 払
- 7. 涼
- 8. 垂
- 9. 放
- 10. 大
- 11. 六

15 □¹是鐘光隨已神往所生之處奪日月光蔽諸天
16 光上銀鐘者帝釈所作頗梨鐘者月天子所造其声
17 所至百德世界至仏滅後二鐘上去各還本土²云々
18 本文云雪山大士捨於全身而得此偈^同
19 裏書云「涅槃」經第十三云昔過去仏日未出我於爾
20 時作婆羅門修菩薩行悉能通達一切外道所
21 有經論○周遍求索大乘經典乃至不聞方等名

「 4 才

- 1. 而
- 2. 億
- 3. 「○」なし（一文字分空格あり）

22 字我於爾時住雪山○¹独処其中唯食諸菓○²
 23 爾時帝釈自変其身作羅刹像形甚可怖畏下³
 24 雪山去其不遠而使立住是時羅刹○⁵宣過去仏
 25 所説半渴諸行無常是生滅法説是半偈已便⁶
 26 住其前是苦行者間是半偈心生歡喜○⁷即從座
 27 起以手拳髮四向顧視而作是語向所聞偈誰之所説
 28 □時四顧不見余人唯見羅刹○⁸即便前至是羅⁹

往生裏書□□

「 4 ウ

29 刹所作如是言善哉大士汝於何処得是過去離
 30 怖畏者所説半偈○即答我言大婆羅門汝今不応
 31 問汝今不応問我是義何以故我不食来已經多日¹
 32 処々求索了不能得飢渴苦惱心乱²（誤）語非我本心所³
 33 知也○⁵爾時即復語羅刹言大士若能為我説是⁶
 34 偈竟我当終身為汝弟子大士汝所説者名字不終
 35 義亦尽以何因縁不欲説耶○⁷羅刹答言今我

「 5 才

1. 「○」なし（二文字分空格あり）
2. 「○」なし 3. 「爾」なし
4. 下＋至
5. 「○」なし（二文字分空格あり）
6. 偈
7. 「○」なし（二文字分空格あり）
8. 爾 9. 「○」なし

1. 「汝今不応問」なし
2. 畢 3. 乱＋課 4. 心＋之
5. 「○」なし 6. 我
7. 「○」なし（二文字分空格あり）

36 定為飢苦逼実不能說我即問言汝所食者¹
37 為是何物○羅刹答言我所食者唯人暖肉其所飲²
38 者唯人熱血自我薄祐唯食此食○我復語言汝³
39 具足說是半偈我当以此身奉施供養○⁴
40 我今為求阿耨菩提捨不堅身以易堅身⁵
41 羅刹答言誰当（信）汝如是之言為八字故棄⁶
42 □愛身○我即答言汝真無智譬如有人⁷

「 5 ウ

1. 苦十所
2. 「○」なし（一文字分空格あり）
3. 「○」なし 4. 但
5. 「○」なし（一文字分空格あり）
6. 「捨」なし
7. 所 8. 「○」なし（一文字分空格あり）

43 施他瓦器得七宝器我如是捨不堅身得金剛
44 身○復有十方諸仏世尊利衆生者亦能証我¹
45 為八字故捨是身命羅刹復言汝若如是能捨身²
46 者諦聽々々当為汝說其余半偈○羅刹即說生³
47 滅々已家滅為樂爾時羅刹說此偈已復作是言⁴
48 菩薩摩訶薩汝今已聞具足偈義汝意所願⁵
49 為悉滿足若必欲梨諸衆生者時施我身於爾○⁶

「 6 才

1. 「○」なし
2. 「○」なし（一文字分空格あり）
3. 寂 4. 是
5. 利 6. 身+我 7. 「○」なし

50 時深思此義然復処々若石若壁若樹若道書
 51 写此偈○即上高樹（尋）即施身自投樹下々未至地時虚
 52 空中出種々声其声乃至阿迦尼天爾時羅刹還復
 53 积形即於空中接取我身安置〔直〕平地我往昔為半偈
 54 故於棄此身以是因縁使得超越是十二劫在弥勒
 55 前成阿耨菩提云云 本文云如癡狗追塊 同
 56 裏書云玄義第二絶待妙中云言語從覺觀生

往生裏書□□

└ 6ウ

57 心慮不息語何由絶如癡犬塊徒自癡勞塊終不絶若
 58 能妙悟環中自覺觀風心水澄清言思皆絶如点師子
 59 放塊遂人塊本既除塊則絶矣积籤云名字如塊真
 60 理如人無明癡犬遂名言塊種智師子得理上已名云々
 61 本文云西域記云波羅妮斯国施鹿林東行二三里
 62 有涸池同隠裏書云波羅妮斯国施鹿林者旧云波
 63 羅奈 鹿野園 智度論云昔波羅奈国王入山遊蕩見二鹿

└ 1才

- 1. 後
- 2. 「○」なし（二文字分空格あり）
- 3. 提
- 4. 種
- 5. 復十帝
- 6. 二十积

- 1. 犬十遂
- 2. 疲
- 3. 息
- 4. 理十已
- 5. 「已」なし
- 6. 婆
- 7. 洞
- 8. 「書」なし
- 9. 婆

- 64 群数各五百各有一主有一鹿主身七宝色是迦¹「菩薩」²
65 復有一主是提婆達多「菩薩」³鹿主見王殺其群党起大
66 悲心直至王前諸人競射飛箭党如雨王見此無所忌⁴
67 憚必有深意勅令勿射鹿至王所跪白王言王以少事一
68 時令鹿受於死苦若以供饌当差次送每日一鹿善⁶
69 其於是二主各差次当調達群中一母鹿白其主言我死⁷
70 分当而我懷子々非死次屈棄料理使生者不濫死者¹⁰
1. 是十釈 2. 菩薩
3. 菩薩
4. 真 5. 「党」なし
6. 鹿十王
7. 其十言 8. 差十次送 9. 中十有
10. 垂

「 1 ウ

- 71 得次王怒之曰誰不惜命次来但去母恩惟言我王無慈
72 横見瞋怒即至「菩薩」¹王所具白王言大王仁慈如我今日
73 天地曠遠無所控告具以事白「菩薩」²王言若我不理狂殺
74 其子若非次更差後次何遣唯我当代思惟既定即
75 自送身遣鹿母還群「菩薩」³鹿王到其王聞衆人見之怪
76 其自来以事白々亦怪之王問曰群鹿尽耶而忽自来王⁶
77 言大王仁慈人無犯者但有滋茂無有尽時但彼群鹿
1. 菩薩
2. 菩薩
3. 門
4. 次 5. 白十王 6. 来十鹿

「 2 才

78 帰告於我々愍之故若非分是亦不可若縱而不救無¹
 79 異木石是身不久必不免死慈救苦厄其德無量
 80 若人無慈与虎狼何別王聞是語即從座起而説
 81 偈言我實是畜獸名曰人頭鹿汝雖是畜生名曰鹿
 82 頭人以理而為人不形為人我從今日始不食一切肉我以無畏³
 83 施亦可安汝意諸鹿得安王得仁信鹿群所居故名鹿
 84 苑^云本文云猶如盲龜值浮木^{欣求淨見仏聞法樂}

「 2 才

85 裏云弘決云如大海中有一盲龜爾時海中復有〔浮〕木々
 86 唯一孔可立龜身此三千年方得一出億百千出何由可值²
 87 浮木之孔³ 本文云儒童捨全身而始得半偈^同
 88 裏書云釈迦者燃燈仏時名為儒童^{云々}
 89 本文云常啼割肝府而遠求般若^同
 90 裏書云大品第「二十」⁶九云仏告須「菩提」⁷菩薩摩訶薩求般若⁸
 91 波羅蜜当応如薩陀波倫菩薩摩訶薩^{大般}本求^{常啼}

「 7 才

1. 生
2. 分十差
3. 次
4. 不十以
5. 「云」なし
6. 淨十土

1. 「云」なし
2. 此十亀
3. 孔十^云
4. 「同」なし
5. 「書」なし
6. 「書」なし
7. 「三十」
8. 菩提
9. 密
10. 陀十崙
11. 「倫」なし
12. 般十若
13. 十是菩薩今在大雷音仏所行菩薩道

92 般若波羅蜜¹時不惜身命不求名利於空閑林中聞
93 空²聲言汝善男子從是東行莫念疲極莫念睡
94 眠莫念飲食莫念書夜莫念寒熱莫念内外³○
95 爾時薩陀波倫菩薩報空中言我當從教⁴○
96 受是空中教已從是東行不久復作是念我云
97 何不問空中声我當何処去當從誰聞般若波羅蜜⁵
98 是時即住啼哭憂愁念我住是作是中過一日一夜

「 7 ウ

99 若二三四五六七日七夜不念疲極乃至不念飢渴寒
100 熱不聞聽受般若波羅蜜因緣終不起也○時空¹
101 中有仏語薩陀波倫菩薩言善哉々々善（界）（男）子
102 過去諸仏行「菩薩」道時求般若波羅蜜亦如今日善男
103 子○從是東行去五百由旬有城名衆香²又云是衆
104 合城中有大高台曇云竭「菩薩」摩訶薩宮舍在上其³
105 縱広一由旬皆以七宝校成其宮舍中有四種娛樂園

「 8 才

1. 密
2. 空十中
3. 「○」なし
4. 命 5. 「○」なし（二文字分空格あり）
6. 去十當遠近 7. 般若若 8. 密
9. 愁十作是 10. 「作是」なし

1. 般若若 2. 密 3. 「○」なし
4. 菩薩 5. 般若若 6. 密
7. 如十汝 8. 「○」なし（二文字分空格あり） 9. 去十此
10. 香 11. 無 12. 謁 13. 菩薩
14. 舍十舍 15. 其十宮
16. 「舍」なし

106 一名帝¹二名離憂三名花飾四名香飾曇無竭²「菩薩」共
 107 諸姝女遊戲娛樂已日三時說般波羅蜜³○汝善男⁴
 108 子往趣曇無竭⁶菩薩所當聞般若波羅蜜⁷善男
 109 子曇無竭⁸菩薩世々は汝善知識能教汝阿耨⁹菩提⁹
 110 示教利喜¹⁰○爾時薩陀波崙¹¹「菩薩」於曇無竭¹²「菩薩」生恭¹³
 111 敬受樂尊重心作是念我當以何供養曇無竭¹⁴
 112 菩薩今我貧窮我當売身得財為般若波

往生裏書 七丁

「 8 ウ

113 羅密故供養法師曇無竭¹菩薩○是時薩波崙²「菩薩」³
 114 中道入一大城至市肆上高声唱言誰欲須人誰欲
 115 買人⁴○爾時惡魔隱蔽諸波羅門居士令不聞其
 116 自売声除一長者女魔不能蔽爾時薩陀波崙⁵「菩薩」
 117 売身不售憂愁啼哭在一面立⁶○第「四〇」云是時帝釈
 118 化作婆羅門身在薩陀波崙菩薩辺行問言汝善
 119 男子何以憂愁啼哭顔色憔悴一面立⁸○答言波羅

「 9 才

1. 帝十喜 2. 謁
3. 般十若 4. 密
5. 「〇」なし（二文字分空格あり）
6. 謁 7. 密 8. 謁 9. 菩提
10. 「〇」なし（二文字分空格あり）
11. 菩薩 12. 謁 13. 菩薩
14. 愛 15. 謁

1. 謁 2. 薩十陀 3. 菩薩
4. 「〇」なし（二文字分空格あり）
5. 菩薩
6. 「〇」なし（二文字分空格あり）
7. 悴十在 8. 「〇」なし（二文字分空格あり）

120 門我愛敬法自壳為般若波羅蜜²故供養³曼
121 無竭⁴菩薩今我壳身無有買者⁵爾時波羅門語薩
122 陀波崙「菩薩⁶」言善男子我不須人我今欲祀天當須人心⁷
123 血人髓壳与我不是時心大歡喜○語波羅門言汝
124 所須者能尽与汝波羅門言男子（汝）須何価答言
125 随汝意与我即薩陀波崙右手執利刀判左臂出
126 血割右脾肉欲破骨出髓時有一長者女在閣上

「 9 ウ

127 遙見薩陀波論¹菩薩自割身体不惜寿命○即³
128 下閣到薩陀波論⁴「菩薩⁵」所問言善男子何因緣困苦其⁶
129 身用是心血髓作何等薩陀波崙「菩薩⁷」答言壳与波羅
130 門為般若羅蜜故供養曼無竭菩薩○爾時帝釈¹⁰
131 即復本身讚薩陀波崙「菩薩¹¹」言善哉々々善男子汝堅
132 受是事其心不動○善男子我実不用人心血髓
133 但来相識沙願何等我当相与薩陀波崙言与我

「 10 才

1. 壳十身 2. 密 3. 故十欲
4. 謁 5. 「○」なし（二文字分空格あり）
6. 菩薩 7. 心十人
8. 「我不是時心大歡喜○語波羅門言汝所須者能尽与」なし 9. 婆
10. 言十善 11. 即十時
12. 脾

1. 唾 2. 崙
3. 「○」なし（二文字分空格あり）
4. 崙 5. 菩薩 6. 困 7. 菩薩
8. 若十波 9. 密 10. 「○」なし
（二文字分空格あり）
11. 菩薩 12. 「○」なし
13. 試 14. 汝

134 阿耨「菩提」¹ 帝釈言此非我力所弁是諸仏境界必相供養
 135 更索余類薩陀波崙言汝若於此無力必見供養
 136 令是身平復如放是時薩陀波崙身即平復無有□⁴
 137 瘡癰如本不異帝釈与其願已忽然不現爾時長
 138 者女語薩陀波崙「菩薩」⁵ 言善男子来到我舍有
 139 所須者從我父母索之尽当相与我亦当
 140 辞我父母与諸待從共汝往供養曇無竭⁶

往生裏書 八丁

「 10 ウ

141 菩薩為求法故是時長者女莊嚴七宝
 142 車五百乘身及侍女種々宝物供養之具¹
 143 持種々水陸生花及金銀宝花衆色宝衣^{2 3 4}
 144 香持沢瓔珞及味飲食共薩陀波崙「菩薩」^{5 6}
 145 五百侍女各載一車恭敬圍繞漸々東去⁷
 146 遙見衆香城既入城中見曇無竭「菩薩」⁸
 147 坐高台法座上無量百千万億衆

「 11 才

- | | |
|----------|--------|
| 1. 菩提 | 1. 種 |
| 2. 願 | 2. 種 |
| 3. 「波」なし | 3. 華 |
| 4. 故 | 4. 衣十好 |
| 5. 菩薩 | 5. 梔+香 |
| 6. 侍 | 6. 菩薩 |
| | 7. 玄 |
| | 8. 菩薩 |

148 恭敬圍繞說法薩陀波崙与長者女及五百時女取供
養具花香「瓔珞」²幡蓋分作二分一分供養般若波羅蜜⁴
149 一分供養法座上曇無竭「菩薩」⁵曇無竭品云是時曇
150 無竭「菩薩」⁶說法日沒起入宮中薩陀崙「菩薩」⁷摩訶
151 薩作是念我為法放來不応坐臥当以
152 二事若行若立待法師從宮中出說法曇
153 無竭「菩薩」¹²七歲一心入無量阿僧祇「菩薩」¹³三昧中

「 11ウ

155 及行般若波羅密方便力薩陀波崙「菩薩」¹七
156 歲經行立不坐不臥無有睡眠無欲恚惱心²
157 不着味○是時薩陀波崙「菩薩」⁴与長者女為曇
158 無竭「菩薩」⁶敷七宝床○薩陀波崙「菩薩」⁸○敷座已⁹
159 求水灑地而不能得所以者何惡魔隱蔽令
160 水不（現）爾時薩陀波崙「菩薩」¹⁰作是念我当自
161 刺其身以血灑地令無塵土來坊大師○即¹¹

「 12才

1. 侍
2. 華 3. 瓔珞 4. 密
5. 菩薩 + ○
6. 菩薩 7. 陀 + 波 8. 菩薩
10. 故
11. 立 + 以
12. 菩薩 13. 菩薩

1. 菩薩
2. 行 + 住 3. 悉
4. 「○」なし 5. 菩薩
6. 菩薩 7. 「○」なし（二文字分空格
あり） 8. 菩薩 9. 「○」なし
10. 菩薩
11. 「○」なし

162 以利刀自刺出血灑地○爾時曇無竭「菩薩」²摩
 163 訶薩過七歲已從諸三昧起為說般若
 164 波羅密故與無量百千萬衆恭敬圍繞往
 165 法座上爾時薩陀波羅「菩薩」⁴及長者女到量⁶
 166 無竭「菩薩」⁷所散天曼陀羅花頭面礼退坐一
 167 面曇無竭「菩薩」⁹見其坐已告薩陀波崙「菩薩」¹⁰言
 168 善男子諦聽諦受今當為汝說般若波

往生裏書 九丁

「 12ウ

169 羅蜜相善男子諸法等故当知般若波羅¹
 170 蜜亦等²乃至諸法不可思議故当知般若³
 171 波羅蜜亦不可思議是時薩陀波崙⁴
 172 波摩訶薩即於坐处○得六万億諸三昧⁵
 173 門○薩陀阿波崙菩薩從是已後多智⁹
 174 惠可思議如大海水常不離諸仏生於¹²
 175 仏国中乃至夢中未曾不見仏時一切¹³

「 13才

1. 「○」なし 2. 菩薩

3. 上十坐 4. 崙 5. 菩薩 6. 曇

7. 菩薩 8. 礼十畢

9. 菩薩 10. 菩薩

1. 密

2. 密

3. 密 4. 陀十波崙

5. 「崙波」なし 6. 「○」なし

7. 六十百 8. 「億」なし

9. 「○」なし（一文字分空格あり）

10. 「阿」なし 11. 多十門

12. 惠十不 13. 於十有

176 衆難皆悉已断在諸仏国随願□□¹

177 本文云如彼身子等六十劫退者是也^同

178 裏云（智）度論云舍利弗六十劫中行菩薩行

179 有波羅門從其乞眼舍利弗言当²

180 乞有所堪者此眼無堪波羅門言不須³

181 身及財物唯須於若汝实行檀者当⁴

182 以眼与我便出一眼与之波羅門得也⁵

┌
13
ウ

1. 往生
々云

2. 婆

3. 婆

4. 於十眼

5. 婆

183 嗅之語此眼臭唾而棄之以脚踐之舍利弗¹²³

184 言此弊惡人何由可度実無所用而強索之不⁴

185 如自度早免生死^{云云}本文云象子力微身波刀箭⁴⁵

186 ^同⁶上觀第七云若大象王雖聞困合不亦⁸

187 忍独去自知力大堪遮力箭守護其子⁹

188 合群安穩得免心如蹈水火又起慈悲¹⁰

189 如母念子衆生盲冥不覺苦燒我今云何□

┌
14
才

1. 語十言 2. 垂 3. ム

4. 歿 5. 「刀」なし

6. 「同」なし 7. 止 8. 「亦」なし

9. 刀

10. 今

190 之独去安耐生死以智方便教化淳熟
 191 作得度因緣於自功德法身惠命展(転)
 192 增長有緣機熟即坐道場成仏与衆生
 193 共出三界如彼大象自他共安若少象子¹
 194 雖折刀箭必為所中自他無益初心「菩薩」^{2 3}
 195 欲入生死々々触之退善根法身破壞⁴
 196 弘決云三祇為大象初僧祇為少菩薩^{5 6}

往生裏書 十丁

(後欠)

└
14
ウ

1. 俱
 2. 難 3. 菩薩
 4. 之十失
 5. 祇十初 6. 名

参考文献

- 『金沢文庫資料全書 第四卷 浄土篇（一）』（神奈川県立金沢文庫発行、一九八〇）。
- 石井教道『昭和
新修法然上人全集』（平楽寺書店、一九五五）。
- 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九）。
- 納富常天『金沢文庫資料の研究』（法蔵館、一九八二）。
- 同『金沢文庫資料の研究』稀観資料篇（法蔵館、一九九五）。
- 山崎誠『中世学問史の基底と展開』（和泉書院、一九九三）。
- 塚本善隆（金沢文
庫所蔵）『浄土宗学上の未伝稀観の鎌倉古鈔本』（『浄土学』二、一九三三）。
- 佐藤哲英「金沢文庫に見存する恵心僧都撰述に就いて」（『龍谷学報』三〇九、一九三四）。
- 石田瑞麿「金沢文庫における浄土教典籍」（『金沢文庫研究』二四四、一九七三）。
- 福原隆善「叡山における『往生要集』の展開」（『往生要集研究会編『往生要集研究』、一九八七）。

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

県立金沢文庫蔵「往生裏書」
解題・翻刻（上杉）

Summary

A Bibliographical Introduction and Diplomatic Edition of Shingen's *Ōjō uragaki* 往生裏書 in the Kanagawa Prefectural Kanazawa-bunko Museum

UESUGI Tomofusa

The text of the *Ōjō uragaki* 往生裏書 is owned by the Kanagawa Prefectural Kanazawa-bunko Museum. This is a fragmentary version consisting of 14 sheets and lacking the introductory and final parts. “*Ōjō uragaki* 往生裏書” apparently was a provisional title. The formal title of the work is unknown. However, I compared it with the *Ōjō yōshū uragaki* 往生要集裏書 version in the Shinpuku-temple 真福寺, and my conclusion is that they are almost identical texts and that the original title was “*Ōjō yōshū uragaki* 往生要集裏書”.

The *Ōjō yōshū uragaki* 往生要集裏書 is an annotation of the *Ōjō yōshū* 往生要集 by Shingen 真源 (1064-1136). The work actually represents an investigation into the textual sources of the *Ōjō yōshū* 往生要集.

I compared the Kanazawa-bunko version of the *Ōjō yōshū uragaki* with the Shinpuku-ji version, and the characteristics of the former became clear:

- 1) Judging from the number of its Chinese characters, the Kanazawa-bunko version represents a third of the Shinpuku-ji text.
- 2) The sheets in the Kanazawa-bunko version are not arranged in the correct order.
- 3) The missing introductory part amounts to about 3 sheets.

The *Ōjō yōshū uragaki* 往生要集裏書 has been so far known only in its Shinpuku-ji version. The discovery of the Kanazawa-bunko version makes it possible to collate the two texts and opens the way for a critical edition. I hope that my diplomatic edition and study will contribute to this.